

一．現地入り

タクシーが1台、杉木立の中へすべり込んで行った。まもなくタクシーは左側へ折れ、杉林を真直ぐに抜ける道から姿を消した。道路脇の窪みに停まったタクシーの中から一人の若い男が下り立った。

「おつりはいらんよ」

そう言って男は歩き出した。男の右手に下げた合成皮革製鞆の持ち手の間に、グレーの上衣が挟まっていた。

道路脇の窪みの底に当たる部分に石柱の門があった。右側に車輛用の出入り口があり、左側が人の通用門になっている。両方とも開いていた。通用門の右の柱に会社名と工場名を鋳出した真鍮の板が嵌め込んであった。

中肉中背の丸顔の男は通用門を通して守衛所の前に立った。タクシーの遠ざかるエンジン音がまだ聞こえていた。

守衛に軽く頭を下げ、男は自分の会社名と用件を告げた。守衛が入場者名簿を差し出すと男は鞆をコンクリートの上に下ろし、黒のボールペンで会社名と氏名、用件をていねいに書き込んだ。守衛が名簿を受け取り、番号欄に数字を書き入れた。

守衛の書き入れた番号と同じ数字が黒々と浮いているプラスチックの胸章を受け取ると、男は構内へと遠ざかっていった。小さくなっていく男の後姿を、夏の名残りの薄れた午後の陽射しが柔らかく包み込んでいた。受付台に残された名簿の氏名欄には、四角ばった文字で“真藤圭介”とあった。

工場の騒音の中で高瀬の話を聴いていた真藤圭介は、覚えのある声に呼びとめられた。工場内に入ってからまだ30分と経っていない。技術主任の秋山は圭介の到着を待ちかまえていたようである。大阪人特有の、口先でネチネチとねばりつくような喋り方で、秋山は工事に関する苦情を二つ三つと並べたてた。

機械の据付工事は9月の初めから始まっていた。据付現場の南側はベニヤ板の仮設の壁で完全に仕切られている。壁の向こうでは既設の機械が生産の叫びを上げている。金属製品の生産が工事の粉塵をきらうためにこうしているのだ。

圭介が苦情の一つ一つに頷きながら聴き、型通りに善処を約束と、「よろしゅう頼みますう」と言って、秋山はその場を離れた。

「もう何べんも聴かされとるんですわ」

かたわらで不安そうな顔をしていた高瀬は、そう言って秋山の背に目をやった。高瀬は圭介と同じ会社の組立工で、今回の工事の据付指導員としてこの現場に常駐していた。

「真藤さんが来るのを待ったんや、あいつは。わしらが後で直すから言うても、毎日見に来ては同じことばかり言いよるんやわ」

工事現場には活気があふれていた。ようやく芯出しが終った本体スタンドには、組立工たちが群がって部品を取り付けている。配管業者は、ピットの壁に埋め込まれた鋼材にパイプサポート用の形鋼を溶接するのに忙しい。配管の見習工が形鋼を切るカッターの音がひととき高く響く。

地下のオイルセラーでは設置されたタンクに合わせて、ポンプやオイルクーラーの据付けが行われている。横置きされた縦型オイルクーラーを起すためにチェーンブロックの鎖を引く男たちの声が地底から聞こえてくる。

配線業者がケーブルを敷くためのラックをピット内に取り付けている。配管と同じピットを使っているため、狭いピット内に両方の業者が入り込んで、身動きもしにくいほどだ。

高瀬の説明を聴きながら、圭介は1時間ほど現場を歩きまわった。仮置き of 部品、配管材料、溶接機、カッター等の間をぬって歩くのは神経が疲れる。ピットに渡してある板は乗るとフワリと撓んで、慣れぬ圭介をヒヤリとさせたりした。

完了しているのは、本体の据付けと付帯機器の仮置きぐらいだった。本体の基礎にモルタルを打って固めた後、付帯機器の据付けおよびモルタル打ち、本体まわりの水密ライニングの鉄板ばり、配管工事、配管内の汚れを落とすためのフラッシング、各機器の試運転調整、全体試運転と工事は進んでいく。

機械の据付けが始まると、設計に従事していた圭介たちが現場に出るのはいつものことだった。特に、フラッシングが始まる頃から出番が多くなる。機械のことを一番よく知っているのは設計者だという意識が、製造現場にも工事業者にも根強いからだ。圭介たちの担当する機械は歴史が浅いため、ますますその傾向が強いのだった。

今度の出張を前にして、設計主任の河島は圭介に言い含めていた。
「今回の君の役目は、客先の苦情の本当の原因が何であるかをよく注意して探ること、そして川村君たちの客先に対する姿勢を監視することや」

工事会社の現場監督の川村に対して、注文主から不満が出ていたのだ。秋山の上の高木技術課長から河島のもとへは、時々苦情の電話がかかっていた。苦情の内容は、搬入物の保管の仕方が悪いとか、部品取り付け時の錆落としが不十分だとか、大事な仕上げ加工面にワイヤーロープを直接かけるとかいう類のものだった。

この機械を精密機械の範疇に入れてもおかしくないことを思えば、これらの苦情は妥当

だったろうと圭介は思う。秋山たちをいらいらさせたのは、彼らの要求に対する川村の応答がいつも遅いため、川村が彼らの要求を聞いていないように見えることだったのだ。

一服しながら記録を書こうと圭介は思った。

「ハウスへ行こうや」

高瀬は黙って頷いた。

外はさわやかだった。彼岸過ぎの遅い午後の空はやわらかに澄んでいた。関東平野の真只中にあるこの工場のまわりは、陸稲の田と林で占められている。

工場建屋の北側に、周囲の風景になじまぬ工事用の仮設ハウスが群がり、その向うに工場のグラウンドがある。グラウンドは中央部だけ土が露出し、背の高いすすきや雑草群が風にゆれながら土の中央部を取り囲んでいる。

頭を震わせている草の間から、子供を連れた女の姿が見え隠れしていた。女の背後を目でたどると、テラスハウスのような2階建てのアパートが3棟ほど目に入った。子連れ的女は工場の構内の表通りに入り、守衛所の方へ姿を消した。アパートは工場の社宅だった。

西側の雑木林ごしに中学校の校内放送が聞こえている。ほこりや虫の飛び込みを嫌って、密閉状態に近い構造となっている工場内の機械のうなりは、内にこもってかすかに洩れてくる。屋外に設置されているブロワーやトランスの音も、木々の間をわたる風の音に気兼ねしているようだ。

一枚の壁の内と外の対照はあまりにも鮮やかだった。壁の外に展開する光景は、製造工場には不釣り合いだと圭介は思った。一瞬の脱力感が圭介を襲い、得体の知れぬ何かが圭介の心に触れて消えた。

ハウスの中で北山が手を上げているのが見えた。

工事会社のハウスは一番左端にある。西の雑木林を背にしているため、既に濃く引いている影の中にあった。ハウスの中は壁で二つに仕切られ、南側の三分の一が事務所に、北側の三分の二が資材および道具の置き場になっている。事務所の奥には事務机が二つ向い合せて置かれ、その手前に粗末なテーブルがあった。事務机は高瀬と川村のものだ。

北山の配下の若者が奥で木箱の中の図面を探していた。圭介と高瀬が入っていくと、北山は川村の椅子から立ち上がり、挨拶をして再び腰を下ろした。年の頃は三十七、八だろう。鼻の下に髭をたくわえ、ちょっと腹が出ているこの男は、声帯をつぶしたような渋いしゃべり方をした。

「真藤さん、またひとつよろしく頼みますよ」

「いえ、こちらこそ。北山さんは秋山さんをよう知っとられるようですね」
「前の機械をやらしてもらったからね」

圭介は北山とは一年ほど前から面識があった。他所で同じような機械の据付工事があり、その時北山組は配管工事を請け負っていた。配管のでき映えが良かったことから、圭介は北山の腕を買うようになっていた。

北山組の今度の仕事はライニング工事だった。ライニングとは本体で使う冷却油を本体下の油溜めに集めるために、機械の周囲を鉄板を溶接して囲むことである。少しでも油が漏れると基礎のコンクリートの強度が低下するので水密が要求される。完成後の検査は水を張って行く。従って施工業者の溶接技術は高度なものが要求される。

「どうだろうか、ここの仕事は」
「ここの人のほうが、前のところよりもちょっとうるせえだろうな」
「やっぱり、そうですか。今も秋山さんに文句つけられてたんですよ」
「ふうん、そうかい…」
「高木課長もけっこうこまかいしね。これからはだいぶ神経をすり減らされそうやなあ」
「……………」

北山は黙っていた。左手で額をしきりにこすった。
「進藤さん、吸わんか」
高瀬がセブンスターの箱を圭介の前に置いた。
「ありがとう」
圭介は一本抜き取った。

図面を探していた若者が5、6枚のアンモニア焼きの図面を脇にはさんで立ち上がった。
「親方、あったよ」
「おっ、それじゃまた始めるか」
粗末な板張りの床に荒々しい音を響かせて北山は立ち上がり、出入り口の脇に掛けである黒板を指で押さえながら言った。
「ここまでは今日中にやっちまおうと思ってるんだ」
北山たちが出て行った後、高瀬がぼつんと言った。
「川村さん、あのおっちゃんとあまりうまくいってないみたいや」

圭介は感心していた。北山はやっぱ一匹狼の職人だった。高木や秋山のことは何も言わなかった。高木や秋山から、一号機の工事の際に北山の態度が悪かったこと、工事がいい加減だったのでいつも目を光らせていなければならなかったことを聴かされている圭介にしてみれば意外だった。三ヶ月ほど前の工事の打合せの場で、下請業者の候補のうちに北山組の名が挙がった時、秋山は顔色を変えて難色を示すほど

だったのだ。

高瀬が再び現場に戻っていくと、ハウスの中は圭介一人になった。しばらくの間、圭介は風の音の中で記録をつけるのに専念した。圭介が記録を書き終える頃には、あたりはもう薄暗くなり、頭の上に裸電球が一つ光っていた。

しばらくして、川村たちが5、6人連れ立ってハウスの方へ歩いて来るのが見えた。今日の仕事の上がりだった。